英典研究　三

182.85
Ko518m
W

三世の光巻之三

時に太子思惟したまハく我今出家の时ハられふをむかしくる
すがきなゞばいかにも父大王の御けしきをとゞめてと思しきハ
免かひてとゞに御うれんおほ孫子ゆるそほひのたゞうときハふ亡
夫世やうやく女衆に一と世たゝぬ御影もそれ御威儀ハ詳序とミ
ちそなハせてうゞやさうゞ恰も帝釈天の梵天まゆうてのすふに似さ
王宮のうちなる御侍人とともにおどろきてかくと奏すれバ大王
きゝ給ひゆく王なく第の御くるを一つ喜びつゝ覚へ来たら思し
たゞよひおわしまはす太子の王もなべて御あしを乱しあひ御座
定まるで後やがて白しのふそれ世間ハ恩愛の集会も必離別の形らん

國立國會圖書館藏書

巻三 之一

國立國會圖書館藏書

国立国会
25.3.31
図書館

112255

ガラス使用

やそれ今日にいたりて家を出家をゆるされ給はゞ学道成就ならん
うへ何ゆゑいきとしいけるものをもれなく愛別離苦をまぬかれしめん
ぞして然らば大王何ぞかれ必留の事なく速に出許せ給ふべし
いぐ家にひとつの業はあらじといふべければ入て給ふあり
給ふ也大王是をきこしめしつよく御心おもくなりて金剛をもて
山を摧くがごとし然ども子なればにて肝座をいたくしたまひて摺
あはれみて太子の御手をとりつくづくとして又かへすがへすも宣ひ
やらばなげきて涙ぐみ問ひいらせたまひしが良ありて御
声をほそめて宣ふは汝今出家学道をとゞまらばその代
いかんと将バまづ御年いと若し又いまだ国の御世嗣なし

きぬ事や未だ世の中を顧ずして何故がちに我を棄たまふは余り
あまりに情なし一切衆生を救ひのみにかゝはるともえおぼし
侍らばと宣へば太子又宣はくちゝぎみわきて世にわたまくほしき
もの四つ有り一つには是を与へ給はゞ我出家の志を止め侍らん
一には不老二には無病三には不死四には不別也大王きゝたまひ
やかれ此おもひやまぬ志なれどもわれにては此四つの請は是を願ひ給ふも
らんはまでと古往今来一人にも得たる人のありしばこそはあらめ
と宣ひて又泣になき入たまひ更に御許し有べうもあらざりしかば
然れば詮方なし父まで宣ひ強かりしも今は中々悲しからん
年ふりつゝは探くるまで松を時雨の染めし御涙にくれたまひ

に至らせたまへば今八我家（わがえ）を去へも殆（ほとんど）もて形やみなひとろく
なぐさめてはそのふかずおほやけはせまふりてみなわかなき侍
られ成。重又此時太子にみな重の夫人おはしましし中に耶輸陀（やしゆだ）
羅夫人（らぶにん）をもて上首（じやうしゆ）として諸（もろ）の色をそへまゐらせ日々のちからを烏陀夷（うだい）
大臣の子なさちらに侍らせてことさら時ごとにおもむきを楽しますせ乃
中の理（ことわり）をおりしくもおもしろくも説（とき）なぐさめまゐらせらる
やがて夜（よる）はおとゞに入せたまへば三夫人のその傍ぐはとろゐはべり当
形しや御殿（ごとの）の主夫人は耶輸陀羅夫人（やしゆだらぶにん）おはし御ぎの御殿
には鹿王夫人（ろくろう）右には瞿夷（くい）夫人みな二第の妹（さい）女居（ゐ）めぐりて
おのこゝみ系しき夜（よる）乃まぶり日のときまゐらせ重ねそうなしね宮内（こやうち）也

そこに迦毘羅施兜國（かびらせそこく）の大相師（だいさうし）等（とう）太子もし此七日の中に出
家せ給ふをのそくざらせば必轉輪（てんりん）の御位（みくらゐ）にのぼり四天下の
王たらせたまひ七宝おのづから至らん事を占（うら）べまうして甚よし
き往て大王に奏（そう）しまうしまらす大王此語をきこしめして大いなる
歓喜（くわんぎ）しまひ即（すなはち）諸臣（しよしん）に向ひのたまはく汝ら相師（さうし）の言をきけ
りやいかなる事ありとも此七日をさへ過せば我太子かならず
金輪王（きんりんわう）に登（のぼ）りまうさんに我時こそ我等（われら）諸人（しよにん）もろともにうち
随（したが）ひて虚空（こくう）に飛騰（ひとう）し四天下をみん事今なるべし楽（たのし）
みつべしやおのおの勤（つと）めて此日数を防衛（ばうゑい）して必悔（くい）なからしむる者
と八千（やち）の兵下知（ひげぢ）を加へたまふまづ劫毘羅城（かふひらじやう）に七重（ちう）の塹（ほり）をほり

めぐらしみなくろがねの門をかまへ其門上(そのもんじやう)にことごとく鳴鈴(なるすゞ)をかけおきたまひき閉(とづ)るたび毎(ごと)にその鈴声(れいしやう)四十里(り)余(よ)まできこゆといふ大臣(だいじん)猛将(まうしやう)八四種(しゆ)のつはものを領(りやう)じておごそかに城(じやう)の外(ほか)を守(まも)る旃もとより太子の宮門(きうもん)をば皆(ことごと)戸ざしをかためその城上(じやうしやう)に雲(くも)の梯(かけはし)を構(かま)へたとへ使命(しめい)なりとも必往来(ゆきゝ)すべき者もあまたの人これをはなちぎをうけて通(かよ)はしむ太子のおはします楼殿(とうどの)には伶(れい)人妓女(ぎによ)多く侍りて夜昼(よるひる)となく舞踊(まひ)ていたくなぐさめ奉る又宮中(きうちう)には摩尼珠(まに)をかけ遊上(ゆうじやうでん)に篝をたきしめ玉ふ八重(やへ)の閤もきらめきて何ぞさしその昼(ひる)のごとし大王は殊(こと)さらのち四乃兵(つはもの)をひきゐて城(じやう)の東門(とうもん)をまもらしめ斛飯王(こくぼんわう)は南の御門白飯王(びやくぼんわう)は西の御門甘露飯王(かんろぼんわう)は北の御門をかためまもらせたまひ大名釈迦族(しやくしゆ)はもれなくぬを領(りやう)じて城内(じやうない)を巡行(じゆんぎやう)しかさねて油(ゆ)断(だん)なくいましめ眠(ねぶ)る者をおどろかし誠(まこと)に露(つゆ)のたゆみなく防護(はうご)しまたふほどに遂(つひ)に六日もすぎてたゞ一夜にぞなりにけり此一夜に輪王(りんわう)の御代定(さだま)らせたまふべきもろんなれば大王はしもなかなか何事ともあらん人の心の内いかならんと推量(おしはか)り給ひしほどに天帝釈(てんたいしやく)の常(じやう)法に観念(くわんねん)して下界をきこしめたまふ事ありこの時にあたりて人間界を観じたまひ頌(じゆ)を説(とき)たまふ

釈迦牟尼國王子　修㆓シ六度行㆒ヲ皆ナ圓具ス

愛㆓樂シ出俗ヲ處㆒ミ山林ニ　以テ求㆓ム無上真如道㆒ヲ

ガラス使用

斯て太子ハ常のごとく宮の内に静坐しておはしましけるが
御心のうちにふかく念じ給ひけるハ大王ねんごろに出家を
止めさせ給ふ事ハ専ら国嗣なきが故也我一子を世に遺し
れなば世の為御心を安んじ給ふのみならず何ならでもなほ罪も
ゆるされ倣せて愛別の御愁歎をなぐさめ給はんは似べし
又亦御遊戯中に何ぞならば一夜も俗楽に心を寄せずんば
却て世の人家を丈夫に非ずとする所の嘲をまぬかれまじいざや
今夜娯楽して以て愉快俗を施さんと思しめして舞妓
の袖にも臉をやさしき物の音にも御心を動し給ふおもゝち
の様にはいみじくかざらせて御きびしき様に遊びふしたまひさて

耶輸陀羅夫人を御同臥ありておかしのごとくなしたまひし業
所共婦人同居宿　此是末後同宿時
我今従此更不然　永離女人同眠宿
人々また此頌を説給ひまたさは御手を振してやがて夫人の
御腹を指せ給ふ所ただならぬ御こゝちにならせられつゝ娠め給ふ事
御事を忘れし給へ侍て志ばしまどろませ給ふ御耳に
に耶輸陀羅夫人不思議乃三大相を夢み給ふ一つには月地に墮
たまふ二つには御歯みな落ぬ三つには右の御臂失ならばおどろき
覚給ひて太子に告給ふハく我今夜の眠の中に三悪夢を得
たり太子いかなる夢ぞと問給ふ人ハ凡夫の家海をし語りまさへえ

112255

かゝる太子きこしめして宣はく惣じて夢てふものはまくらをてらしたのむま
じきものゝ浮たる事にして定也然るは是我怖畏のむなさき
にまよひこそ見給へ月今天にかゝり雷も又おちくだり霹靂なほ存
せ給ふは何ぞやと打咲ひて宣へバされど宗には妖ハ徳にかたず
こゝちするにこれらの悪夢はさいはひとて太子の出家し給はん瑞
なるらんと思すにつけくとゑ眠にえゆき給ハで又かしこみつく有
ては叶ぬ事ならばこつくれおもひとまらせ給ハで今し君家
を出なバ家ひとつをば起きるよへと思し入て志ておきこしめすに
太子宣はくこそはや家去処にゆかば必しも引る事ませむいのちあ
はし事をもれくやうや叶ぬ給が努なふさぐひのなぞとうさ

らひなくさめ参らせ給ふ夫人ハとられしとおぼして御心おちゐ給ふらん又
よるねてねふり給へるをさまたげ不祥とおほすべし太子ハ何これとおぼ
し給ひてか父の御父をねぶらせもせで先に立てはどらせ給ひしう
ち給はまくは吉瑞の御夢を御覧じて成等正覚をとげ給ふと御心おち
居させ給ふに又夫人は御夢をきかせ給ひこは必ず今夜御出家とて
おふ給ふらんとおぼせバ夫人乃さも勿せ給ふぬをも更になられとおぼさる
べし上も下も今夜をいのちにて守りなりしまらん心もゆるなるにいの
ちまでバはや婇女妓女常ならずみまいそうらひけりれて乗ふさるまにい
ぎたなうねぶりいりたる太子御出させ給ひの乃稲ふりたる人をも御覧
すれバ髪おみだれ口にまでよだれをたらしあかねごとをいふもありてきが

ガラス使用

をすみもたゆみ衣も乱れて形はあらはれたるもたゆみ右の御殿を御覧すませば瞿夷夫人寝覧によりかゝりてねぶりおはします左の御殿を御らんずれば鹿王夫人琴を持ながら御ねむりおはします太子心に思して今夜出んとおぼせば此三夫人なども吾今夜出なば二度ちぎる事なからん唯後の法縁を待給ふへしとなほひとつには生の身の大夫人の方に向はせ給ひては礼敬をなし給ひ今出家するは一切衆生を救はんが為なり願くは御身安くおはしませ後に法縁を結せ給ふべしとの給ひあるに告させ給ふれどまさめて知人もなし此ときに過去世の同行なる菩薩浄居天神力をもて三夫人婇女などは五臓六腑までみななくさせしむるものへけがらはしき事言ひ姿ふに肉はるに虫うごめきあへる耶輸陀羅は威儀もみだ

れ給ひに二十八相をあらはせ給ひ御身金色のやうにおはしましてもの〳〵かゞやきゝらゝしくまばゆきまで見え給ふ五臓六腑はおなじやうにすきとほりてみえさせ給ひくらべにこれによりて三夫人を始あらゆる女人は不浄遠離の相を生じ給ひしかば太子ふたゝびこれを御覧じ宮はうち捨て山林に入らし給ふべきにおぼしめして御心のうちに

如風吹倒池蓮華　手脚撩乱縦横臥

等の頌をとなへさせ給ひし此宮をのがれ出給はんことをおぼしめぐらし給ふそのよしをみそなはしていかでか出給はんとおぼし召す大梵天王帝釈天などこの御意を知ろし給ふ故に跪合掌恭敬

して須をとかせたまふ

心如未調馬　亦如躁獮猴　能捨五欲樂　速證涅槃明
大慈者起起　捨此大地尊　當得一切智　度脱諸衆生

太子汝見ずやとて須をもてこたへたまふ

如師子王在鐵檻　猛將弓刀守其傍
象馬人衆甚繁鬧　圍遶此城若爲出

帝釈天王また須をときたまふ

昔有誓願今應思　然燈如来先發記
衆生多居苦惱中　應速捨家求正道
我今亦令作如是　及彼梵王諸天等
當令汝得無障礙　詣樹林中修正覺

太子これをきかせたまひ善哉(ぜんざい)とおほせられていたく悦ばせたまふ帝(たい)釈天王(しやくてんわう)寶蓋(てんがい)をもてもろ〳〵の兵衆(ひやうしゆ)と共に浄飯(じやうぼん)大王をはじめつばかぎりなくほんまゐり劫比羅城(かひらじやう)をはなれたる人々おほくあふさまにおほしたる男も女もたかきもいやしきもあはれいぎたなく眠りいねてひとりもさめたる人々なしこれによりて夜叉(やしや)大将(たいしやう)散支迦(さんしきや)に命(めい)じたちどころに[illegible]をとりけ太子をおろしまゐらせぬまづ車匿(しやのく)此所におはしゝを御覧(ごらん)ずれバこまもねぶり入てはやく御手をもてひきうごかしおどろかしたまふにやゝ久しうしてこゝろづきぬ

起起汝車匿　速被乾陟來　過去勝者林　我往彼寂默

とのたまふ車匿ハまづ夢ともうつゝともこゝろちがへたれど

今非遊觀時　汝先無怨敵　既無怨賊來　云何夜索馬

これをきかせたまひ

車匿汝昔來　不違我言敎　勿於末後時　方欲違我命

かくのたまへど車匿（しやのく）なほ夜も今なかバなるといひしらひて馬をまゐらせざりしけ車匿とかくとえはでざるに側の人目をさけ御しなバ出させのふ妨（さまたげ）あらんとおぼし御こゝろ馬王（めらう）乾陟（けんちよく）の馬坊（めばう）へおもむき乾陟太子を見たてまつり何れこゝろのあるらんおどろきたるありさまにて捉（とら）へたまひぐゝし太子は御まれゝちふえんよ

千百宝輪相（ひやくほうりんさう）おハしませど一切のおそれをのぞくこの御手をもて撫（なで）させたまへはみな安穏（あんをん）をうるゆゑにけときも御手をもて乾陟（けんちよく）の頭（かしら）をなでさせたまひ

我今末後時乘汝　速當至彼不久留

我當不久證菩提　當以法雨潤衆生

と説せたまふをきゝ乾陟（けんちよくめわう）馬王やすきをふして御まへに伺ひ太子よろこびせたまひておきいだしのふ梵王帝釈（ぼんわうたいしやく）四天子に太子城門をひらき乾陟を挟（すゝ）ませたまらせのふ（四天子といふハ彼岸天子延岸天子香華天子勝香華天子なり）みな威力をあらはして太子の左右に侍り太子たれか家をおきすて天まれほか去んやとのたまへば空（そら）にこたへたすけなき

ガラス使用

あまて城を出しまさらんと啓す汝等いかなる仏神力かありとも向かせ給へば彼岸天子わが大地をもてとゞめたてまつれはやきゐゆきたまはらんといふ延岸天子我は四大海水もろ〳〵の江河をもになひおほゞへられだてらるやはくいざなひまゐらんといふ香葉天子は一切諸山をも擔ひおほゞへられだてといひ勝香蓋天子は一切の樹林もろ〳〵の藂草も持きてみなもらくになひ負べきれだといひ彼まをつきゐゆかせまゐらんと諮は太子これを受せ給ひ御足をもて大地を按じ給ひ四ゝられし天子におきゐまかれよと仰給ふそれよりその四ゝらともに力を尽しいきたてゝさりしかれど更にうごかせ給はずはまいきゆくまでなかりけり

さりしかばみなおどろきてこの仏大威力おそしまはし事ハ志らざやうなら此御力おはしまさでいかでか今てちぎをなさらんといふ車匿四天子とれしまはかくすをきゝてはしまゐる時太子はえや乾陟に乗しをおそしまは四天子おの〳〵馬の足をたすけやりてそらに騰り給ふ車匿ハかたてにもて鞦をとるちから手には力をとながら太子並四天子との威力にひかれて志たゞいまは宮城のうちにたゞよひとあるに善神みな花のをこ涙落ることを志げきを車匿みれはなれにやといふ太子これや雨にたとへばの今去るをえんて宮中乃善神のなきをきかれし涙なかとをはらせ給ふこれをうけのみて車匿いとゞ

ガラス使用

かなしみなきむせびてこれをもいそぎ太子大世主夫人に
はじめ年月をこさせらるゝまで御側にしかうなまつらう
まゐらせける三夫人もろ〳〵乃婇女にもひとたびおまちせなは
てん二十ゆひ又一処におちて涙にこととなへしとおぼせは
ぐふり座をかん甚へしなふ仏方より御一の出させ給はんと念じし
たまふに東門よりいでさひなば父大王後にもろ〳〵兵士れせる
おろそかなりとてとゞめさせ給ふこともあらじとおぼしまし東
北御門へおろし御しこと御覧ずれば人みなねいりてちむるをせ
なし父王もいとふかく孫いせ給ふをなん夫人かなひ三十までひめぐらして
元服まづ御足をあらいしかのひ我今御意をはなちひて出去六年

殺ある後に阿くだは生老病死よりのがれむ有情は罪をほろぼさんが
ためなりいきとしいけるもの此苦あらざる所なきれはためしなれを
のがれむとするには我今家をいで菩提道にいばらきこの苦しみ
をすくはんとおもひ侍るなりと仰せたまひやがて御らに騰りたまふ
釈子大名将軍は例の宮はうち出めぐり馬に打乗けて東門
のかたへつきに孫ぶらおはせしがはじめて目ばめて太子のふみを
ははぼんなふをなんおどろきたまひ夢をなむなれてなきつゝ太子何
ごとをはさんとおぼせ何ごとをもてなほさんとおぼすと啓しあへ
るやまき出家せんとおもふと仰たまふ大名将軍はいなくこゝろ
いられしのひて是はこれ非法ことそたへれと啓しあふに太子ゆまき

むりよう三阿僧祇劫が中つねに苦行を修し無上菩提を

もとめ一切有情のもろもろの苦難をすくはん今いりて此宮城のうち

にあらんや今出家は一心に法をおもふが為なりと大名釈子

此みことばを聞又ちからにおよびきこのかなしみいかばかり苦なるかな

哉大王大願を発し愛念絶へんとどめまゐらせたまはんとおもひ

ぼせどかうやう此事おこりぬとて

今日淨飯王　爲子生憂惱　擧手呼蒼天　悲恨大號哭

耶輸陀羅等　及諸大宮人　今別悉達已　常爲苦所逼

と此頌をときかなしみなげくをおどろしおぐらいそぎて耶輸陀羅女

人の御もとにまゐりかなしみ是も釈子のいまだ人はおくく御

むねを推して

悉達夫欲去　應可生留戀　勿當後時憂　爲憶夫愁故

今去極難見　最後相見時　苦哉無人聞　覺告勿罪我

聖啓しめへと更に釈子の御めざませのその後大名釈子八王宮に

宮殿のうちをはしりまはりて山の手ねく衆人ってはをまもらせたまへども

うどハせんの昏蓋をかぶりたまひたる人なまばおどろかも月ざむ

るそのなきゆゑこそおもふにはなまでなきかなしみ又大王の

御もとにつへ至宮におとろへしまひけるふ

悉達今欲去　王當速制之　勿於彼後時　爲子常憂惱

かりこ夜三ヶ夜おどろりしまつりたまへども釈子の御ぬけ給はし

ガラス使用

申して志ゐらくも覚はせ給へばそれうちに梵天王等無量百千の諸天眷屬と共に来りなんまうすに又色界の諸天は声もなく儼然として梵天王をまじへ太子の御ひざもとにさぶらひ奉る又帝釈天をはじめ欲界乃諸天もおの〳〵の眷屬と共に御左右におはしまして旛蓋をさゝげ持あるは音樂を奏する者もあり優鉢羅華波頭摩華なと世にうるはしき花をふらすに散し栴檀沈水なとのめでたき香をたきし天のぬ衣をもて大ぞらに散し鼓をうち法螺をふきもろ〳〵乃伎樂をなし太子を供養し奉りかくして終に太子劫比羅城を出させ給ふを梵天帝釈はいさみて歡喜し太子に向ひ手を合せ善哉仁者と申し

初発心の時より世ことをもとめ給ふがまゝいづれの時にかさかりなりして閑なる樹林に往て志望を修せんと君むかしの誓今ことごとく圓滿し給ふ君ぞかし無上道を證得し給ふ時なりこのゆへに我等が攝取し給へと稱ひ給ふ太子汝が所願のごとくあらんとて象王乃古またまへ侍るやうに諸天等を御覧じちかひてのたまふは是もし生老病死憂悲苦惱をだんぜずんば終に宮中に還らじ又もし無上菩提を得ば又法輪を轉ずる事能はざれば必ず宮にかへりて父大王にあひまみえで歡をなし恩愛の情をいたさんをば終まであはじ摩訶波闍波提を見ば耶輸陀羅等の二夫人をもみじと御誓ひをなさせ給ふとき虚空に集りたる諸天善哉〳〵と歎

ガラス使用

らば累しやんと纂じ筆をたゆまず二更よりあけ十二踰膳那をよみせしかども夜もはやあけにける此跋伽仙苦行林にゆきおはし時しれ此林にと志ざしたまひてうまはすゝきことなくまはらるゝことだせまりは健馬よりおりてたゝせ給ふ乾陟の背をなでさせたまひて汝よく我がいきことをなしたまひぬとほめたゝせ給ふ車匿にも此馬は引きとゞめよ金翅鳥王もおよばじなどいひたまひよろこばせ給ふ又車匿はおもしろかりつる御隨從してこのうちをはなれず世間の人善心をおこすなるのち形の隨はだ隨もありやう形はたゞよびながら心のかたちはさ隨もはなれに汝は心もかはらず志たがひてすこしもたがはず志と形く又富貴ときとにきたまひ

志さゞひてゆく事は世界中乃ならひなられに家國をすてゝこれ林中に来るまでたゞ汝とゝも隨ふいと希有なる者を形見と給ひまた鎧をぬがせるにかく世にありせいかば此の者もきあとなげく事みことをも見るにしむずかしくゆげゝれどもひき隨に又給ひまへく心まことの寂靜乃処に至り給へきと今はやくかへり乾陟をつれて宮にかへれよとのたまふ車匿はこれをうけたまはりてはるかにおどろきこのかみもれを乞ひおほくのたまはれ又乾陟はもれをこそ引いて馬だ給ひまて我乃事隨やうかなしきを落しかなしみ望車匿ハ太子を捨まゐらせて我とも宮にかへり参る事と

も更に一の法門とて理をつくし申さとぞ終はなくして語し
なれどなかこの御歎しきこえ太子のきんやがて七宝をぬぎ
をすてて御みづから御ぐしをきり給ふ世尊は過去の諸佛無上正
等正覚を成じ給はんがために飾好をすて鬚髪をそ
り給ふ事も諸佛の法なる事なりとおもひてぬが
せたまひし宝冠と髻中の明珠とを父大王にまゐらせよとて
車匿にたまふ車匿はたまはりてなくなく出家せさせ給ふを
この人すぐに宮中にかへりては太子をしたひ此ことをきこしめしも
てしらせ奏し奉るに皆人も語し奉りければ大にて摩訶
波闍波提大夫人つは今までいまさかせ給ひし瓔珞をおとし給ふ
ならせ給ふ耶輸陀羅夫人へは御身上の荘厳の瓔珞をまとひ
せ給ふ愛別離苦の形をひとつはいまのあたり生老病死憂悲苦
悩をまたくせ給ひはしゆる生をしいけ涙とともに其此上に
しみあはせしとて世をいとひおもひしはいとめでたき道ぞ
おもむかせ給ふ実体をさとらせ給ひて太子のそのやうに中おとしらん
なれども一心に思ひきこえさせ給ふ車匿をめして仰にはなる
ることも御心のひとつも更に覚えずながらこの御事をぞ
思ひ出ては此の形は木石のごとくなれどもあはれとはおもひ
侍らんをこの御形をならの車匿くも御側らをはなれず侍りぬを
いかでわれまいらせてならん此御心だしとなり今日のうちにおぼしめされ

さてもとゞめ奉らんとて地にたふれふしかなしめどもこは
はかなき事とて許しきこえさせたまはねばせむすべなく善
薩は威徳のおもき御事なればかくされてゆくゆく乾陟を召して
劫比羅城にこの由を申さしめ給へ御出家は志を遂させ給ひぬれば
帝釈天王の力きこしめし給ひ御髪をとり奉りて天宮にうつし奉り塔
婆建て供養し給ふほどに諸天みなあふぎたふとびて又
香花伎楽などさゝげて供養し奉る事たえてやまずそのみ
ぎりに天宮にいれまゐらせそのとき太子袈裟の衣をほしけんとおぼ
すをりしも老たる猟師は手に弓箭をとり身に袈
裟をかけて御まへちかく来りぬ太子告給ふそれ衣は出家人の

衣なりわが衣は貴妙なれど俗人の服なりかへんとおもふ
時に猟師きゝこの衣をたまはりて世間に出ば志ひてと
まうすかたもとゞめ侍らんといふはちからをしれてわれ勇猛智
恵はまた世の人なりとくらべ我志あれは家衣を捨ててとまし出
いふもなくあれど汝が衣をはらへると仰たまひ御衣をぬぎかへ
給へるに猟師よろこびまゐらせて袈裟をさゝげ奉りたてまつる
にこの衣をたまひちはりて御身を覆ふは太子念じさせ給ふ此出家
の服ちひさうして勝因ひらけしかも威力あらば福がたくはお
のづから来るごとく我が身をおほへりと念じたまへば太子の威
力と天の御守とによりてたちまちに大きさひとしくなりぬ太子是を

はきをさせたまひぬすでに出家は相かなへられぬれどもなほ苦悩の
衣をまとひまいらすることを願しとてさらにきこえさせたまひて今まではきをさせ
たまひし細妙乃法衣は獵師に給ひをけり（此獵師ハ帝釈天にておはしけるなり　毎比城にひとりの居士ありけり子を生てみな出家して辟支佛道を成せりその母蹉布にまちを作りて此辟支佛に供養しければ此十辟支佛これを見るやがて涅槃にいりければ此物をもちひて淨飯王の御子釈迦牟尼太子阿耨多羅三藐三菩提をなりたまふべし　それには母此衣をもて彼に供養しまゐらすべし無量の功徳を得たまはんといひをはりて十八変の神通を現し身より火を出しみづからその身をやきて無餘涅槃に入たまひぬその母も老て命終りぬむすめは何かくれ給ひし此衣を身にして事乃よしをこまやかにいひ聞ねば如何にもすまひまゐらせて命終らんとする時そこには今の菩提樹にあたりたる首けるその中に此衣を納おきぬ樹神あづかり此衣服ゆゑため手にする請し淨飯王の王子出家せさせたまふを待てきみかのかれよとねがひ竟て終ぬ此たび太子袈裟を求めさせたまふ時帝釈天王下界に現じ太子の御心を知たまひ乃樹の中より衣をとりてみづから獵師となりて参らしくだてまゐらせたまひしとなん）劫比羅城中は大名釈子城の内を三夜たちせめぐり皇
おどろかしまゐらせ最後のとき耶輸陀羅夫人はじめて御目さめ

はせたまひ鐘きかせたまひは御涙したゝる落涙をおさへてなげかせたまふ
此御声におどろきて二万の婇女も目をさまし声をあげて泣
けバ左右の御殿へもきこえみな起てなげかせたまふ摩訶波闍波提も
大王もこれをきゝたまひいそぎ此宮の前におどろかせたまひは御孫ふかきぬ
はせたまふ大名釈子大王へ太子すでに出家せさせたまふと奏せら
るれバきゝたまひて御声も惜まずなげかせたまふ宮の内ちと上
下ゆすりみちたゞなきこゑのみして物おぼゆる人でなかりき
いかなればさ数万といふ守人のみな眠りいりたる
ならんとくやしきどもひとそなげかれけるされば守人おぼつかなく泣さめぐる
ちかぬものまでなりとて千乗万騎おしならべて四方へ尋ね奉る

ガラス使用

ねきりは四方にふせられて居たりちて夜中のしきさまも
きはしきをもほとんどばかり寝殿をもつたすきる中なれと
心はておもむきひとつの方もなかれどみなつゆのみ早て大王に
今はかうと奏しまゐらせしより七日もすぎにたれど宮の内ち
もちいならぬ天の下にあるきぬやしきものなんでたゞありきけなしも
ものかなしい金ちてなん車匿して太子にまいりまゐらせすみ
はやませ給ふ御うしろを見送りまゐらせ給ふがいとあさくほどなく
たゆみのをもえんとちせ給へばがまゐらせて更て走たるひま
まゐらせなみみなふしちてもはやうえてぬ御まきさなくねバ乾
陟をひきて迦比羅城よりへらんとす所に亡時ぞ太子の威力

諸天の威徳にいはなされねむらせてたゞ二更あまりうちふみにまき
どくへきはひ御まきりても おほえぬだちかねしきに出でてひとり
はゆみまふなれ七日がほどふてやうやく城より御まいりきたける城
ちかうなりぬまじバみん所へごとに太子をばいがにふ金まゐらせてあへ
まゐらふ心そでと宮人のいと苦しみ金して馬と共に城へ
入は宮人らにともめられて命ちへもはやくうこそあくめとお
もひおはしまして苑林よりくれて乾陟をひきいまゐらせてのはを
とられてぞ入けむ馬城門にいかまくいかなきまれぞ馬やまつりがゑ
た京馬ども共になきなひたる所かはりてあり宮人らおどろ
きいでゝ見所に太子を見まゐらせみるに声をあげてなきの

しみ乾陟（けんぢよく）の頭（かしら）をとらへてかきくどきなげき給へば此馬（このうま）もこれをきゝてはその形しみはらはらと涙ぬらんは大夫人三夫人もおなじく聲（こゑ）を起こしぬれば大夫人ハうまれさせ給ひしより出にをやしなふ今まで書で金輪王（きんりんわう）の御位（みくらゐ）につかせ給ふを願ひ給ひんとのみおぼしけるに今出家をかくのごとくおはしませば饑（うゑ）し人乃百味（ひやくみ）のあぢはひをうばはれたるがごとくうちの思ひしたゝんまくもちぞおぼさるゝ耶輸陀羅夫人（やしゆだらぶにん）はことにおもひまどひ給へらせなげき給ひしも御側（みそば）をたちはなれさせ給はざりしをすててその事たまひぬ事は去（さり）ぬる道（こち）には此形しく誘（いざな）ひなんと契（ちぎ）らせ給ひしことは家（これ）をすてし給ふ御心ちあれこそおもしろき給れ背（むく）れ

諸王山（しよわう）にいらせて道（だう）を学（まな）びおはしますとおぼしおはしませどみな妻子（さい）をすてきりてすてのみばいかなれば太子かくの御こゝろざしうすうおそれしきんといひをうらめしうおぼし志ざしませ智恵（ちゑ）ある者はなげくべきとなりてもことわりをおもひつきはう添ことあるまでおとすまじきハおそろしき家者なる車匿（しやのく）此釈（このしやく）族（ぞく）はおとろへはてたり太子をぬすみていづちへか送（おく）りとぞ恨（うらみ）せぬちせさせ給ふ又乾陟（けんぢよく）は出させ給ふ時にこそなきて人をもおどろかしぬべきをそれをもりハこゑも出さず秘せ給ゆきて今更このなげきはなくハこゝろなのまほしやとうらみさせ給へど此馬心乃いとほしきに夫人は此詞ことをきゝうきあまりて

理(ことわり)なりしはふたゝびきもやぶれてたゞされ死りまうす大王も車匿(しやのく)
と乾陟(けんぢよく)ばかり帰りまうしたる事をきこしめし又總いらせ給ひしが
志ばしありてしかれどもよくよく思せ給ひ車匿を召して汝いかなれバ
此釈種姓(このしやくしゆしやう)にてかくのごときを奉じ太子乃出家をおそれて厳(げん)
制(せい)をくはへ内外(ないげ)の官属(くわんぞく)に勅(ちよく)して守(まも)らせ奉りしとはにはかに
法家をれを何れところぞやたゞやはく太子をいかにいつくに送(おく)りまいらせて
汝ひとり帰りたる事をとひ太子の命(めい)おごそかなりとも何家(さが)より
いかでめはなしにそむくいとはあるまじきことならずや又はまひせぬ
はせよふ車匿(しやのく)おそれおなき様ふしてなくなくまうし太子の城をいで
させたまふはことに家ちからなき及び帰らぬまゝなき志ぞらく

申すよしなきてはかしめ給ふをきかせなさんことをきこそなげき(まこと)
奉れどもはて奏(そう)し奉る浄太子宮(ふじしきや)を出させ給ふ時(ときこれ)家不勅(ちよく)
して馬(うま)に乗り我おかせ給ふ此ときに家(これ)法経(ゆぎやう)の時よりあらはれ
諸天(そうやう)にいさめ申すの夫人(ぶまん)嫁女(さいみよ)をおどろかしまゐらせんとするに
此夜(このよ)の不思議(ふしぎ)には城(じやう)乃中の上下睡眠(すいめん)いとふかくして一人も
おきる人なしはきますてみなのが門を開(ひら)くことに去(こさ)四十里小声(きこえ)
しづかさうる出させ給ふときは又ほそおれりくしひらきて何れ
こまもとなたび諸神(しよじん)手に馬(うま)の足(あし)をさゝへ出家させまいらせ接(せつ)し
て天(そら)はほたの数(だ)のぎりなき諸天(しよてん)いろいろの供養(くやう)をなして去る
かくなどぬ申まうす心もならずて爰ところにてとおぼえずば

ガラス使用

がら威力におそれてしたがひ奉り侍らねまではとゞめ奉るべきやうも侍らざりしと、なほ歎やるかたにおちし侍りし御ありさまどもを奏し御宝冠を御衣ともに髻中の明珠とを御前におき是をは大王へ奉らせ給ふなり又七宝乃御瓔珞を出し是は大夫人へ奉れよとのたまひし又餘乃御荘厳の具共奉りこれをぞ耶輸陀羅夫人へをくりまゐらせ給ふなりと奏し奉りぬ御前なる人々さへあはれにこのもしきたゞ涙くもゐし殊だ大王は此の御具を御覧じてこれをも取りたまへば手づから御涙の水のこぼれさせ給ふ車匿までことぞ残なくあらためて太子の御事を侍る大王太子の御子だにおはしまさば御出家をもゆるしきこえんの御約なりけるはせし耶

輸陀羅夫人はらみおはしましゝむきに大王ふかくむきゝ御おもはせたまふにもおはしましけれバ御はてみごもらむほどにや、そらきこえければよとぞ孩まゝもせし奏し奉れば大王殊の悦びのせのひ御子ぶふおんしまさでとゆるしきこえさせ給ひしは七日のうちに御出家とれちし給さんとはおぼしめしよゝを給ひし此七日をだにまたでかゝるをはせねば転輪王の御位におのづからのぼらせ給はんとおもひおぼしを待御智恵たさうおはしまして此後しうけ御約をなさせたまひ御出家をとゞめたてはあらずましとよせいとかくやしうぞおぼさまつなされど又たばしくすに諸天善神のたすけを奉らせ給ふ故きりせ給ひまつりしるかめ新しき奇

瑞ともおぼし侍し事阿私陀仙(あしざせん)の相(さう)しまゐらせし事を
などおぼしわすれ給はゞ此御道心(だうしん)をもちまうけまゐらせ給ふ
ことはあるまじきあだなる事と深うおぼし志しけるにふた
たび車匿(しやのく)をもとゞめさせ給ひそば御子(こゝ)おちしまはをこらしみ
れ中の御よろこびにて今は耶輸陀罗夫人(やしゆだらぶにん)をかしづきまゐ
らせ給はんことをぞおぼされ候大夫人耶輸陀罗夫人へゝの
御瓔珞(やうらく)御荘厳(しやうごん)の具(ぐ)を贈(おく)りまゐらせ給ふ大夫人これを御ら
んじて殊に志意(こゝろ)をいためさせ給ふ御なのさ宮中にも中く
なかたゞ四天下の人の務分落して此明智(めいち)の転輪王(てんりんわう)をうしな
へ給ふとのみのたまふにて耶輸陀罗夫人もそなふごとをもれたまは

ば又誓(せいやく)は御筆たへいらせ給ふことなり大王又人なきまゐらせた
まひてたゞふもおりしまし御子バみかゝる愛敬(あいきやう)しなひ御胎内(たいない)
此御子(こゝ)安穏(あんをん)におはしましやうふとおほせ与ぞひとたのもれ
まし御やうふなぐさめ聞え給ひ給ふ大王車匿(しやのく)をよびて給
ひ太子は家をすてゝいで給ひ道を学(まな)び給へど御こゝろ
この君は見まゐらせ給ひてでは此世におはし給さん御こそさとも給
させたまひぬいらふなるん延形なともかねおそし給さんとお
ほちに今いづくにかおはし給ちん事たゞ御さ世給ふこのこと
を大臣たちうきなる事にはたのむまじき御ことなりもし
か様しう出給せまたで天竺下の御とぎなさらん事をおこのく

ガラス使用

らひまづ王師と大臣ふたり御まへにまゐりておぼつかなさおほ
せけしそもそも御理王にいたしませど太子おほせたまひぬま
ば天の下ことに大切におはしまし浄飯王いたくまでもゆき
侍りておはします御思をもとめ出奉らん由奏し奉給これを
聞せたまひきふとおぼし召しさらば御たづねの主を求め参ら
せよとぞ仰せまそせ給ひしこれより二人は劫比羅の都をいで車
匿にきてぞゆけるの方試ひてにたどりつゝ終にかの跋伽仙人
の苦行の林にたづねてぞゆきけるこのものにつきぬればさぶらふ人
をこそそらにとがれき此ちぐさりをもはなて仙人のすみか
にすみ入ぬ仙人これを見て請じいまだ世ちにまゐりて世尊

尊はこの座をはらひぬれば王師仙人にむかひて我ハ白浄王の師な
るが近ごろこゝにまゐりぬるは大王の太子生老病死の苦しみをいと
ひ宮を出させ給ひ仏の道此林によるべきとおぼし侍りてこゝま
でたづね奉りぬるなり大仙たる人をみん殊さらにやと問ひて仙ちかくには
我とこの童子のころち世になし殊にきく人にんとをおぼえ侍る相
好になぜうのふこのたびに参りつひ議論し殊に一夜をかたらせ
給ふわが修す仏道はいやし阿羅邏迦蘭をとはんとて北を
さしてさりたまひきぬれやたづね参らせ給ふ太子にこそおはし
まさめと云ひければ王師も大臣もいとうれしくおもひいそぎて北
にむかひみなとを追奉らんとかくて行ほどに太子路のかたを望

ぼだい樹下（じゆげ）におはしまして端坐（えんざ）思惟（しゆゐ）しまふたはりけることもなく
よもすがら光は月日のひかりにおとらぬを見たまひいそぎ
馬より下（お）り王侍衛（じゑ）をしりぞき儀服（ぎふく）をぬぎ御前（みまへ）にまゐり
はいれいを申あらひ給ひてそうさく大王きみをしたひ
きこえさせたまへるに家等（これら）を遣（つかは）しておはしますをたづね
もとめさせたまひたゞ此え主君をおぼしながらさせたまふ御事乃
火はさかりにもえたつがごとくたゞひとつめをはなつのひかり見ればたゞ
君の御なげきせのふかきまちにもはせまひてけはれたる乃苦（くる）しみを
やみたまひとおそれおぼしめさるゝ大王大夫人をはじめ三夫人
等は御意（こゝろ）乃うちをおぼしやすめてたゞちに宮にかへらせたまふ

はるかに仏勢（さむ）たかきをも家等たすきをはなれて道業（どうごふ）をばさまたげ
なられども申たまへどもはしりて啓（けい）しまゐらす家主は太子をとおもく
しき御ことなれて父王などは恩情（おんじやう）乃ゆゑかおはしますなど家
をらでかくいでまゐるにやはべらんたゞ生老（しやうらう）病死は苦（くるし）みおそる
御申ぬるなる事はみなし愛（あい）をだにやめればほかにもまみえなきならん
此生老病死の之さとしみなるかせば何によりてくるしむなきならん
大王は御こゝろまかせむきなかれて當来（たうらい）を離（へだ）てはなしみゆつむ
おとはおほふ御思なりて宮にかへりて世はたゞしんことは燄火（えんくわ）の
なり此御七宝（しつぽう）は家にみちて満人なく毒は御じき好食（かうじき）
はう思た御人もなふにうしなひきがおぼし昔は諸王山はいま

て道を学びたまふも中路より帰りて欲楽をうけたまふはいかにぞ父王わが宮に帰らんことをおぼして先王の法に違ひたまへ汝なからといふなりまじきことぞ聖人は王師と説給きよしなれど又ことを申あらためて世に残させ給ふなるふこそ信ずれば後聖我から先聖の説をきくなり未来はさだんで果報いかにとおもひ又我しといふ先聖なれば決定の有無を志らば太子いへるぞ現楽をすてゝ未来不定の果報を求めたまふ生死果報の有無はよくさとらしめさせ志らしめ給でいふこそ解脱の果をもとめんとおぼすらくおぼしめさくらして我くは宮にかへらせ給へとかくすゝめ奉られば

太子のたまふやう二世も未来の果報をとくなりと二人ともに申さしいひ一人は我しやうふみなるらひ心にて決定の説にはあらざれゆゑに我身の為しへふをそせうぐそあなかふ為うれことをさそてあまた我がことは為らざれば是今當来の楽果をもとめんとてあたに来際子あらば同のまへに見るところの生老病死の苦しみ必ず後為手をさとりてこれをまぬかれんためと我求道なり達りかねにて家道の成ずるを見るべしわが此志をば辞まことは為りしかば父王へもよろしく奏せられよとのたまひすてゝ御座をたゝせたまひ又北にむかひてすゝませたまふ王師も大臣もこれを見奉りて我からせんすべなきゆゑて太子の御志の深きをおもひ

又ふたゝび勅をうけ給ひてちからひとなきをかけさせ給へり
かみさにむきびめくえしもくへらで路けふるにまちかねとは
まいらにのせまし給ひくらゐをかれあとぞなきかくてゐまたら
ゑらみはゞこれ中智恵あり心やまことに忠直にて種族
もすぐれたる人五人をえらびすぐりまゐらせてその太子の御
ゐまはしまさらうかゞはせ給ふからは一つへ入まゐらせてあとをたゝしを送しまゐらす
らんとうちのくらゐ阿若橋陳如などれ五人をえらびてとゞめ
ぬけ人々は扨びて立わかれ御あとをしたひゆきし王師たちは
おくれさながらにかへさる道にてもまむかまつる（け五人の説ハ釈迦譜なり破傍事おは太子侍者）
なりしてひとかわせのふことをきりせのひ劫比羅城より童子三百人天示城より童子二
百人をおくらせのふけ五百人常によりねうして静ならねバかくその所移ひまくなさせ

のそこれまりて御父宗親の中三人御母宗親の中二人をとゞめ
余はおのく国にかへらせのふけ五人にはねよ太子よずい志ゆうすまゐらせ太子ハ阿
羅邏迦蘭仙人の住処におはし海さんとて恒河をわたらせ
のふれの道王舎城によ渡ちいの城中の人民太子の御相好を
せふめてたくことに優れさせのふ鉄へんなまふものことびぬんで敬ひ
ちまわしつまてのみなのふの音にとこの法を説すう頻婆沙羅王の
宮にも聞きてかく頻由王おどろきこのみそ何ぞの音ぞといふそせ
のふまへ人々ゐまは浄飯王の太子御名を薩婆悉達と
やすひむつし相師くらならひまゐらせても世間におそし海
ちば転輪王の御位をば四天下を志らしめさんもし出家お
させのもでば必ず一切種智を成就したまふん迄相しまへるが

ガラス使用

今おもひ見て此城にいらせたまふ太子は國の人民ら皆こびきそひ法をとひて又無量佛法がかうむりしゆゑに傳へるものなれバと奏は王いたく悦びまして一人に勅し太子のおりましける處を伺はせたまふに般茶婆山といふ山におはし傍らし石のうへに端坐思惟しまします使者かくと奏せしに奏ハ王やがて駕をめぐらせ諸臣臣民とともに太子の御もとにまうでたまふ般茶婆山におはしてむかへたまふに太子の相好光明の月日のひかりにもまさりたるを見まゐらせまづ飾をはなし侍衛をとどめおきこすみ坐して太子を問訊しまします四大調和にておはしますやいかにと申しあげまつりてまた此國にいらせたまふ事は我國ゆづりたまひの為かと申しを承べ

あひ又仏までとおもひけれバもぎたひしこと修行し太子ハもとより月の種姓にておはしませし世々轉輪王の位を捨てまします太子今輪王の相悉く備はらせたまふの彼等おもひいたるなれバこれをすてて遠く去りておはしますこの深山にいらせたまひて浄土をもとめたまふもし父王世におはします御息にて聖王の位をとらせ世をおぼしめさば家國ならびに財寶をもて奉らむもなにほどかはおぼさずぞこの座をすべて無量家はいとよすがとしてつこ人まゐらせ又おのれもなほ御心にかなひたまはぬことあらば四兵をもて他國をもうち従へし君とおぼすところありてまゐらせば即ち御意にまかせまゐらせんらしむと申しけるに太子の御心ややすくまして申したまへバ太子もそれ御志を感

じほせのひ王は種族明月の如くにておはせばひとへにおのれ
つかへらるべく涼しくいやしき姿を形しかるに候ひしものことをみな
きこやく世に勝れたる人王たるべきをすまにこの妄の撃ゑ哉出しかるふ
いと奇なる姿をなすか象かうたんまゐらするに形みぐるしき人をえ
情の及びぬべきにまた達せられども今輪王の位をもすてゝ
家を出何事よ生て此王乃國をとらん又王の善心をもて
ほくまふだふなほうけざれば兵を発して他の國哉をとらん
などはおもひ依るべきもとよし好にて家父母にわかれ鬢
髮を剃生れぞき國をすてにて五欲乃菓を求んとする
あらぬ世間五欲の楽を火の大事なりまれバあれをやきつくすんの

ごとくいきとしいきる者も此哉焼侍るなりこれほれ石の若しみ
をれが隊もれなし王今身命財におきて三堅の法を修しその人
このまへて不堅乃法をもて人にすゝむることをなす是家今こゝに
末流は阿羅邏迦蘭といふ二人の仙人おはしこれ解脱を求
る最上の道導師なりときくかしこに行きて解脱の道をも
免んとおもふなりかくしうおふに阿る庵きおらしにわれ王の云
聚には遠ひぬれどいのでこゝ御志しをよろこびはん感じき
ならず浄ことは汝のごとく根みぎせのふな王今よりの正法を
もて國民をなでやしないのへとれさまひてやがて立たまのふ
頻婆娑罗王これを見のひいとおる形くおぼしなみだをながし

ガラス使用

手を合せきこみをおきんじ給はず見んなまりてかぎりなくかゞきなきまとに思ひ給ふ程せし城のうちにせのふを見まれば、この事しみに堪（え）侍らばれたまでと生死解脱（しやうじげだつ）させまいらせんとおぼすと彼まばらへて出家なさらばきこゆれ期（ご）し給ふところ速（すみやか）またたしかひてよろし道成（だうじやう）じたまはゞまづ我（われ）を度（ど）し給へ与とれはまひちきうたまふ太子立わしのまんと勧させ給へバ王おくの第みらせ路（みち）のさはりになりて帰らまれ見え給ふかぎり見をさかたまひ歸なきき形がらこの人群せ給ふ

ガラス使用